

## 「建築学の基礎」刊行にあたって

近年、バブル経済の破綻・国際化社会・自然環境保存・コンピュータの急速な普及による高度情報化などの社会的条件の変化、ソフト志向・価値観の多様化などの人々の建築に対する考え方の変化、それに伴うハードおよびソフトの高度な技術的条件の変化などによって建築は多様に変化しつつある。この日々増大しつつある建築学の広範な知識をすべて、大学教育で修得することは不可能といってよい。

経済不況などによって多少の落ち着きを取り戻し、戦後体制の各種見直しが迫られている現在、大学における建築学の教育もまた、各種の見直しまたは改革が試みられている。これらを集約した、大学で学ぶべき建築学の標準的教育テキストシリーズが現在求められている。

この建築学の知識には、健康で安全な人間生活を守るという時代を超えて修得すべき基本的知識と、時代の条件の変化に対応して応用すべき流動的知識とがある。

本シリーズでは、これから建築家・建築技術者を目指す学生を対象に、大学で学ぶべき標準的専門科目を取り上げ、卒業後の専攻にかかわらず活用できる‘建築学の考え方と知識の基本と応用’をバランスよく修得できる大学教育テキストを意図した。

本大学教育テキストシリーズは、当代建築学の最先端の研究者であり教育者である執筆者の方々によって書かれている。本テキストを利用される方々の、その十分な活用を心から願っている。

東京理科大学名誉教授・工博

編 者 井口 洋佑

## はしがき

建築構造の入門書は、いくつか刊行されているが、構造力学の入門書であったり、構造関連分野の複数の著者によるオムニバスのなものであったりして、まとまった形のものなかなか見当たらない。東京大学の建築学科のカリキュラムにおいて、進学が決まった2年生後期に「建築構造計画概論」を導入したのが、1996年度からで、著者が担当させてもらって、すでに16年になる。ちょうど、日本建築学会から「建築構造パースペクティブ」なる建築構造をCGで表現する試みを取りまとめ、刊行した直後でもあり、学生にとって楽しい教材を使っただけの授業が可能となった。

学生時代に、工事中の高層建築を眺め、鉄骨が床を支え、幾重にも空間を作り出しているのが美しく見えたことが、建築構造に興味を持ったきっかけのひとつでもある。ちょうど、ミース・ファン・デル・ローエの絵のような単純な構成であるが、そこに、さまざまな技術が織り込まれていて、また地震や強風に対する安全性への経験が生かされている。実務としての構造設計は、膨大な基準書が使いこなせるかということに多くかかっているが、その基本は、構造力学であり、空間構成の想像力である。

章の構成は、授業の流れをそのまま表している。6ヶ月で14回という程度の限られた時間ではあるが、建築構造のさまざまな魅力をちりばめたいと思って、全体を組み立ててみたつもりである。小さな写真やCGの表現は、とても現物には及ばないが、一方で、私たちがものを理解するということは、膨大な情報の中の本質的なところをどうやって自分の知識とするかにかかっているわけで、概論で提供できるものは、膨大な情報の中の種であると思う。読者は、それに水や肥やしを注いで自分のものに育てていって欲しいと思う。

建築は美しくなければいけないということと、建築は安全でなければいけないということ。どちらも、きわめて哲学的な思索を避けて成り立たない。物事を学ぶにしても、仕事を遂行するにしても、あるやり方で形式的に進めていく

過程と、立ち止まって基本を振り返る時がある。本書は、建築学の初学者に建築構造の魅力を見出してもらうことを念頭において取りまとめたものではあるが、また同時に、基本を振り返る時の参考に供してもらえんとすると、著者の望外の喜びである。

本書執筆のきっかけは1999年に青山博之先生（東京大学名誉教授）に声をかけて頂いたことに始まる。その後、何度か筆を進めつつも挫折を繰り返していた。東京大学を退職する最後の年の授業にかろうじて間に合わせることができたのは、共立出版(株)の瀬水勝良氏の辛抱強い励ましによるところが大きいく、あわせて感謝申し上げる次第である。

2011年12月

著 者